

新国立競技場案を 神宮外苑の歴史的文脈の中で考える

榎 文彦

誰もが人生の中で様々な出会いを持つ。或るものの出会いは強く印象に残り、他は忘却の彼方に消え去っていく。建築家の私も建築にかかわった中だけでも、様々な出会いに遭遇してきた。場所、建物、人、そして建築にまつわる事件……それらの多くは極めて離れた空間と時間の中の出来事であり、それぞれが私の記憶の室に収められている。しかし、何か一つの出来事が起きた時、それまで一見関係がなかったような記憶が室から引き出され、お互いに関連した一つの思考の世界を形づくっていく。

最近、新国立競技場案がメディアに発表され、そのイメージを見た時に私の遠い場所と過去の出会ひも含めて様々な出会いが鮮明に浮かび上がってきた。

東京体育館の設計

今からほぼ30年前の1984年、我々はプロポーザルによって東京体育館の設計者に選ばれ、その作業を開始していた。この地区は(図7)に示されるように風致地区に指定された地域の中にあつた。ここは東京でも風致地区の第一号であつたが、何故第一号であつたかは次の外苑の歴史の中で少し詳しく述べることにする。

この風致地区でもある代々木公園では、原則として建物の総建蔽率は2%を超えてはならない。この同じ4.5haの場所には既に1952年、第1回アジア大会の会場として、室内体育館と水泳場が建設されていた。スタジアム通りの諸スポーツ施設も含めて、2%の建蔽率は既に超法規的に緩和されていたのである。

しかし、新東京体育館の設計に与えられた条件は、既存の施設の建蔽率、そしてその最大高さ28mを超えるものであつてはならないということであつた。一方新体育館は、旧体育館の観客席4,000に対し2倍の8,000席が要求され、様々な諸施設の総床面積もまた、既存施設の2倍であつた。こうした厳しい条件の中で、道路面からわずかに上がった人工地盤の下にはこの施設の半分に近いボリュームが収められている。敷地の南側と東側の既存街並みに圧迫感を与えないよう、建物のボリュームは極力抑えている。そして最もボリュームの大きいメイン・アリーナは周縁道路に接する敷地の西北部に寄せて配置している。しかし北側に隣接する新宿御苑のこの部分に最も接したところから見た時、御苑の樹間から体育館の一部は見えても、樹木を越えてアリーナの屋根が見えてくることはない(図1)。

また体育館はここを訪れる人々だけでなく、敷地の東に展開する現国立競技場も含めて隣接する地区への近道を提供している。

時にこの近くを訪れた時に、人の流れを見ていると、アリーナの曲面の壁に沿って歩いている人達の動きも自然であり、その向かいにある小さなカフェも結構賑わっている。完成後、23年を経た今日、そのデザインのすべてが自慢したり褒められるものではないが、メイン・アリーナが使用されていない時でも広場では親子がキャッチボールをしていたり、そこには穏やかな風景が展開している。

都市景観の作法

発表された新国立競技場案のパスが一葉、日本のメディアに公表された時、私の第一印象はその美醜、好悪を超えてスケールの巨大さであつた。私自身がすぐ隣接する所で体育館を設計したその経験から直感的に抱いた巨大さであつたが(図2)、このパスはよくこの2つの体育施設のスケールの差を示している。

次に私がこの案に対して持った関心は、その接地性、言うなれば与えられた場所の中で、目線のレベルでその対象建築が様々な距離、角度からどう見えてくるかであつた。もしもこの案の正確な立面、平面を与えられれば、コンピューターグラフィックによって即座に数十箇所からその見え方を検証することができたのだが、残念ながら私はそのインフォメーションを持っていないので、当分こうしたイメージをもとに検証を進めていかなければならない。そして、おそらく新国立競技場案の場合、我々の時と異なつて、既存の施設の規模を遥かに超える「超超法規」が適用されたのではないかと思われる。

私がハーヴァード大学に学んだ時、デザイン学部学部長は当時、都市デザインの権威ホセ・ルイ・セルトであつた。次の彼の言葉が一生忘れられない。彼は、「都市で道を歩く人間にとって最も大事なものは、建物群の高さ15m位までの部分と人間のアソシエーションである」と言った。つまり人間と建物の視覚的關係には様々な距離が介在する。しかし建物に近づくに従って彼の触覚も含めた五感的体験はこの原則に支配されていく。それが人々の建築に対する好意を持つかの判断のベースにもなる。道行く人々にも様々な生態がある。そこを訪れるもの、散歩するもの、ジョギングをするもの……。今回のこの提案では東京体育館と現国立競技場の間の外苑西通りに沿った南北に延びる都市公園はほとんど消失し、2つの体育施設を結ぶ道路の上部には広場のスケールに近いプラットフォームが提案されている。

計画の段階で建築の接地性、周縁の環境との關係を単に俯瞰す

写真：北嶋俊治



図1 東京体育館



図2 新国立競技場入選案のポリウムと周辺環境

るだけでなく、先に述べた目線からもチェックし、理解するに最も有効な手段は対象プロジェクトの縮尺模型である。我々は普通それをスタディモデルという。1990年に現東京国際フォーラムの国際コンペに、私は丹下健三、I. M. Pei氏等と共に審査の一員として参加した。Pei氏以外の二人の海外からの審査員に対しても周縁の状況をよりよく理解してもらうために、有楽町、東京駅、皇居のお堀端、JRを越えた銀座方面までを含めた敷地模型を用意し、参加者の提出したモデルを一つずつ落とし込み、様々な角度から数百の応募案を検討していった。もちろん目線からのチェックも当然なされた。その時、モデルが図面よりも何よりも一つひとつの案を絞り込んでいくのに効果的であったことを今でも鮮明に覚えている。主催者東京都の当時の知事は鈴木俊一氏であった。

今回新国立競技場のコンペに参加する設計者には、模型提出は求められず、4枚のパースのうち外観パースは鳥瞰図一葉だけが求められた。一方このコンペにも二人の外国人建築家が審査員に含まれていた。

また、今回の新国立競技場のような巨大な施設には十分なゆとりのある敷地が与えられていることが望ましい。何故か。それはイベント終了時における多数の人間をいかにさばくかという機能上のゆとりへの要請だけでなく、こうした施設が一般市民に必ずしも愛されるものでない、あるいは好ましくない時に生じる問題が常に存在するからである。例えば図3は、北京の「鳥の巣」の写真である。そこには十分な前広場がとられている。しかしエルサレムの「嘆きの壁」のように誰もが近づきたいと思うことは少ないのだ。私も「鳥の巣」の前に立ってみても、この写真を撮った距離くらいから遠望すれば充分であり、現在多くの市民も一瞥して立ち去るものが多いのではないか。それは都市の記念碑的なものについても言えることなのだ。日本のように何世紀も島国であったところと異なり、絶えず他民族の侵入のあった大陸では記念碑自体の存在は複雑な政治的、宗教的理由によって必ずしも万人に愛されるものではない。その時、十分なゆとりを建物周縁にもつことは、様々な感情のバッファー・ゾーンの役目も果たしているのだ。

現東京体育館、原宿の国立代々木競技場と新国立競技場の比較表が図4である。ゆとりとは物理的な機能だけでなく、人間の五感と建築との関係のあり方を示す重要な指標なのである。そして既に述べたように巨大構築物は必ずしもそこに住むもの、通過するものにとって親しまれ、愛されるものであるとは言えないのだ。

神宮外苑の歴史

青山通りの外苑前と青山一丁目の間を移動する時、通りの北側に展開する2列の並木とその焦点に位置する聖徳記念絵画館(以下絵画館と略称する)が作り出すその姿に強い印象を受けないものはないであろう(図5)。特に周縁が闇に包まれ、絵画館の灯りだけが夜空に浮かび上がるその光景は、東京の数少ない都市景観の一つに数えあげてよい。そして図7は昭和6年(1931年)頃のこの地域の地図である。後に述べるように、外苑は当時の市民に広く開放されたスポーツ施設をもった地域であるが、この地図をみる限り、主役は絵画館とイチヨウ並木であり、スポーツ施設は脇役に過ぎないことがはっきりとわかる。そしてこの光景を述べる次の短い一文に触れる機会があった。「絵画館前は整然と4列に植栽されたイチヨウ並木、噴水、前庭である芝生広場が続き、そして絵画館を焦点とする空間構成。このような西洋的な空間構成は、日本では稀である。それは近代の都市計画における歴史的遺産として貴重である。」^{*1}これをつくった人々の気概と誇りに似た気持ちが我々に伝わってくる。それでは誰がどのようにして内苑、外苑をつくったのか。このことは最近出版された今泉宣子の『明治神宮—「伝統」を創った大プロジェクト』(新潮社(新潮選書)、2013年)に詳述されている。以下、私のこの項に関する記述についても彼女の著書に負うところが大きい。

1912年、明治天皇崩御の翌年、民間有志一浪沢栄一、時の東京市長阪谷芳郎等の請願を受け、天皇奉祀の神社、明治神宮建設の端緒が開かれる。現在明治神宮があるところを内苑と称する。そして明治神宮外苑(以下外苑という)が提案され、内苑に対して外苑は公園、特にその後各界からの要請に応じて、市民に広く開放されたスポーツを中心とした公園として整備されていく。しかし重要なことは、当初より内苑、外苑、そして表参道、裏参道が一体として計画されてきたことにある。このことは図7の地図がよく示している。

先に東京体育館の設計の項で触れたように、この地域が東京の風致地区第一号に指定されたのは、その背後に明治神宮との関連性を重視した姿勢の表れであり、今日この地域が単なるスポーツ公園と考えられたのではなかった証左でもある。内苑の明治神宮はその本殿が太平洋戦争で焼失したが、1958年には復元、一方外苑は絵画館と周縁の公園造営が大正15年(1926年)に完成した。この代々木の鎮守の森、外苑の公園、更には明治神宮神殿、宝物殿、そして聖徳記念絵画館の建設にあたっては、当時の日本の建



図3 北京オリンピック競技場「鳥の巣」

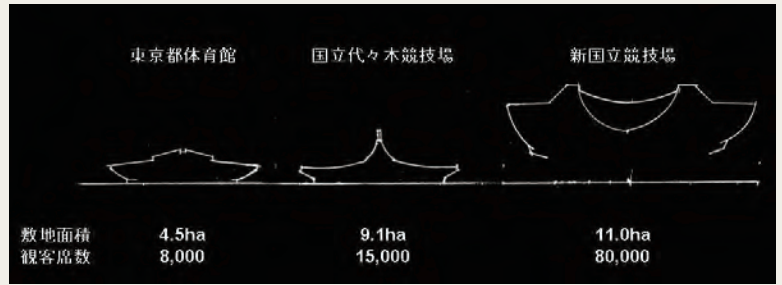


図4 競技場比較表

築、造林、農学の碩学が情熱をもってその造営に参加したことが、先に述べた今泉の書で様々なエピソードを交えながら語られている。特に伊東忠太、佐野利器、関野貞等は我々建築家にとっても馴染み深い名前である。

しかしこの項の冒頭に触れた青山通りから見た絵画館の美しさも、次第に絵画館に近づくにつれて失望に変わっていく。何故なのか。広い芝生の西側には仮設かと見まがう粗末な建物が幾棟か立ち並び、絵画館の前面道路は屋外駐車場になっている。そして新国立競技場案との関係は、図6に示されている。

2050年の東京とプログラム

日本の人口は今年をピークとして以後減少に向かう。その減少率は世界先進国の中でも最大で、2050年には現在人口1億2千万人が1億人になるという。15%以上の減少率である。もちろん、人口減少は地方小都市においてより顕著であり、東京は若干緩慢であるという。しかし少子高齢化は当然並行して進み、特に東京住民の高齢化は高いパーセンテージで進むという。そのことは税収の退化、医療費の増加化を意味し、国家、地方自治体に大きな負担を与えるものであることは想像に難くない。それは直ちに巨大施設の維持、管理費の問題としても現れる。

今回のコンペ案はすべて与えられたプログラムに基づいてデザインされたものである。この項の論考はむしろプログラムについての考察であると言ってよい。まずプログラムの第一の特徴は8万人の観客を収容する全天候式の施設を要求しているということである。多くの競技、例えばサッカーもラグビーも雨天でも行うスポーツであるから必ずしも全天候型である必要はない。したがってプログラムの解説にあるように、スポーツ選手以外にアーティストのパフォーマンス、またはコンサート、更には広義の文化的行為の活用をこの全天候施設に期待しているようである。

しかし8万人もの観客を動員し得る、あるいはサッカー場の広さを要求するパフォーマンスはロックコンサートくらいしかない。

現代の若者たちは特性の一つに、車離れ、旅行離れ、スキー離れ等がある。次の数十年間、ロック離れが進まないという保証も全くない。

また、プログラムには一見、スポーツ競技運営のためのサポート、ホスピタリティ機能に対し膨大な面積が求められているが、それはほとんど収益を生まない部分である。店舗、レストランも、要請されている規模はプログラムからは判然としないが、かなり

の面積が見込まれている。東京体育館ではアクセスと見晴らしのいいところにやっと1箇所、レストランを設けることができたが、総床面積は200m²である。店舗はない。

一方プログラムでは800~900台の駐車能力のある規模の駐車スペースが要求されている。六本木ヒルズは今年創立10周年を迎えたが、年間平均来場人数は約4千万人という。かつて故森稔社長が私に述べたことに、地下駐車場をつくり過ぎたという言葉が思い出す。六本木ヒルズの駐車台数は、ホテル、マンションを除くタワー部分で約1,000台である。

また、プログラムによれば、この施設の総床面積は29万m²になる。その規模は国立代代木競技場の8倍、東京国際フォーラムのそれの2倍を越す。この巨大で、様々な複合施設を維持していく上で必要なエネルギーの消費量、管理に必要な人件費、それらを賄う収入の見通しと、その見通しを支える将来の市場性等について、この施設運営者は都民に対して十分な説明責任があるのではないだろうか。何故ならばその可否は都民が将来支払う税に密接に関わりあっているからである。換言すれば、17日間の祭典に最も魅力的な施設は必ずしも次の50年間、都民、住民にとって理想的なものであるとは限らないからである。

さらに重要なことは、既に述べてきたように濃密な歴史を持つ風致地区に何故このような巨大な施設をつくらなければならないのか、その倫理性についてである。そしてその説明は現在の我々、将来の都民だけでなく、大正の市民にまで及ばなければならない。何故ならば神宮外苑、内苑の造営には、当時唯一の言論のメディアであった新聞も含めて、国民、市民の意見も活発に反映されていたからである。その造営は単に一群の識者によって施行されたものではない。

アテネの広場から

半世紀以上も前、正確には54年前、私はアテネのパナティナイコ (Panathinaiko) 競技場前の広場に佇んでいた。その前年受けたグラハム財団基金による長い西方への旅のひと時であった。この広場はアテネの中心地区から後方に見える小高い丘に向かう道路のTセクションに位置している(図8)。それは予期しない偶然の出会いであっただけに、息をのむ美しさであった。紺青の空を背景に白い大理石の観客席と前面広場の輪郭を緑が柔らかく包んでいた。おそらく世界の都市造形の傑作の一つに挙げてよいだろう。広場に佇むもう一人は私の同行者で、私はこの1枚の絵を



図5 絵画館とイチョウ並木



図6 新国立競技場入選案と絵画館

通して素晴らしいパブリックスペースとは一人しか人がいない時にも美しいものだという説明にしばしば使ってきた。しかし、今回の新国立競技場案が発表されて以来、私の記憶の室からこの1枚の絵は別の意味をもって引き出された。

パナティナイコの歴史は長い。紀元前6世紀に当初より運動競技施設としてつくられたこの施設は、様々な手が何回も加えられ、1870年そして1896年のオリンピックにも使用される。そして嬉しかったことは、2004年のアテネオリンピックの際、この施設をテレビのスクリーン上で偶然とらえた時であった。

それは半世紀前私が見た広場の光景と全く違わないものだった。もちろんメイン会場ではなく、確か射撃の試合か何かが行われていて、前面の広場には少数の人々が忙しそうに動き回っていた。

しかし、今回ここで取り上げたかったことは紀元前2世紀に改修されたこの競技場が既に5万人の収容人口をもつ施設であったという事実である。施設のエンジニアリングのことを言っているのではない。一般に昔の統治者であれば5万人もの人が集まるところをつくるのは宗教的な機能を持たない限り躊躇したに違いない。我々はアラブの春における広場の役割を最近目撃してきた。紀元前2世紀に5万人の観客席を持った競技場をつくったということは、施政者の市民に対する信頼が存在し、換言すれば市民社会が既にそこに成熟していたことを物語っている。市民社会とは今日どういうものなのだろうか。ここで私は二つの別の出会いを紹介したい。

私がノバルティス製薬会社の仕事をここ数年スイスのバーゼルでやってきた時、ちょっと彼の地で話題になったことが昨年あった。それは市の中心部の一隅に想定されたコンペの最優秀案に選ばれたザハ・ハディドの設計になるコンサートホールが市民のリファレンダムによって過半数の反対票の結果、否決されたという出来事であった。案は東京のそれと比較すると極めて小規模で、建物が敷地からはみ出ることもない抑制のきいたものであった。しかしスイスでは重要な公共施設の建設にあたって市民のリファレンダムにかけられることが多い。それは税金を支払う市民にも建設の当否について意見を述べる権利があるという主張に基づいている。この時の否決は必ずしも彼女のデザインスタイルに対してではなかったと思う。何故ならば、その数年前チューリッヒの湖畔に想定されていたスペインのモダニスト建築家、ラファエル・モネオの文化施設の案も、リファレンダムの結果建てられなくなったからである。

東京のザハの案は最優秀案に選ばれただけでなく、見るものを

元気づけるという賛辞までもらっている。おそらく彼女は苦笑していたに違いない。本当に苦笑したか否かは分からないが、もしも私が彼女の立場であつたら苦笑したということである。

市民社会について、もう一つの出来事を思い出す。1996年、今からほぼ20年前、私はオランダ北部にある、かつてハンザ同盟にも参加していた運河都市フローニンゲンの依頼で小さな浮かぶ劇場を設計した(図9)。テフロン製のスパイラル状の屋根をもったこの小さな船は、夏の気候の良い時、市民達のための音楽祭、詩の朗読、岸辺に停留してパフォーマンスの舞台等に使われ、多くの市民から親しまれてきた。しかし夏の音楽祭に間に合わせるために早急につくられたこのテフロンの屋根が不完全で、数年後、市の保有する“浮かぶ劇場”はお蔵入りせざるを得なくなったことを風の便りに聞いていた。それからさらに数年経った2000年の中頃か、私は全く見知らぬフローニンゲンの一市民から手紙を受け取った。その主旨は次の通りであった。「貴方が設計した“浮かぶ劇場”は市によって処分されようとしている。しかし我々はぜひあの“浮かぶ劇場”が運河で、また様々なイベントに使われることを強く希望している。オランダでは公共の施設は、その設計者の同意がなければ処分することは許されない。ぜひ、市に、建築家として保存の希望があることを伝えてくれないか」という文面であった。私は喜んでその主旨の手紙を市に送った。そして3年前、この船をつくった時から市側でその実現に協力してくれた担当者から1通の手紙が届いた。「喜んでくれ。修復の予算がついた」。この事件と先に述べたスイスのリファレンダムは一つのコインの表と裏なのだ。つまり成熟した市民社会では、公共の資産はそれを建設する時も、あるいは撤去する時も、その許可は市民の同意なくしては得られないということである。当時“浮かぶ劇場”の総予算はせいぜい3千万円程度のものであったに過ぎない。

パナティナイコの競技場の歴史、バーゼルでのリファレンダム、そしてこのフローニンゲンでの経験は、一見、時間、空間的に全く大きな距離をもった個別の経験であったが、それらが互いに関連した一つの出来事として私には理解し得るようになったのである。

それでは日本に市民社会は成立したのだろうか。江戸の徳川幕府は300年にわたって、さしたる反乱もなくその主権を維持してきた。これは世界の政治史でも稀にみる例である。その封建社会は当然、divide & rule、つまり分割統治が基本原則であった。

次に、常に存在した仮想敵でもあった大名群には参勤交代という制度を幕府は敷いた。これは島国である日本において初めて実

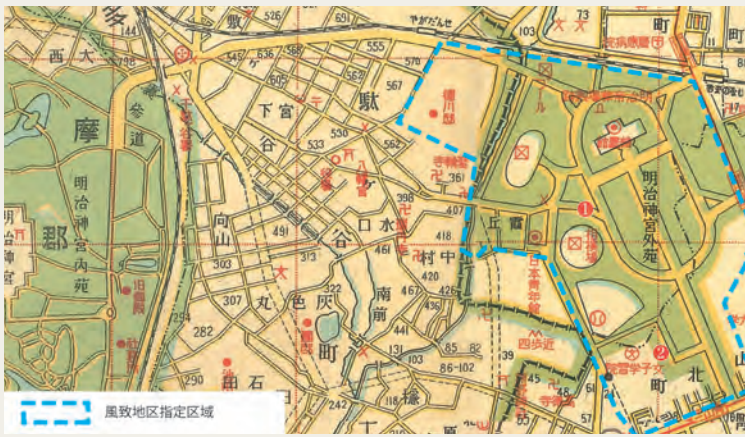


図7 昭和6年(1931年)頃の神宮外苑周辺地図



図8 パナティナイコ競技場

行可能なシステムであり、地続きが多い大陸の国々では不可能なシステムである。そして多くの庶民を集め得る広場の代わりに、社寺境内も含む名所群が分散して設けられた。そこでは少数の武士と庶民の交流も許される数少ない場所であった。そして名所の外には吉原と歌舞伎があれば充分であり、統治歴史に比類のない空間政治学の賜としての安定した封建制度は19世紀の中頃まで存続した。そして日本は市民社会を経験することなく一足飛びに近代社会に突入する。封建社会の武士が構成した“お上”に代わって、官僚の支配する“お上”が今日まで続いていることは、よく知られている。

したがって今回の国際コンペの特色は、“お上”の一部の有識者がそのプログラムを作成し、誘導してきたと考えてよいのではないだろうか。そしてコンペのプログラムには、前述したこの地域の濃密な歴史的な文脈の説明は全くなく、コンペ参加者に与えられたのはフラットなサイトだけである。したがって私は、最優秀案も含めて海外からの応募作品の敷地に対する姿勢についてあまり批判するつもりはない。ザハ・ハディドにとって今回のコンペは、毎年世界中のどこかで行われている国際コンペの一つ(one of them)にしか過ぎない。彼女の3Dモデリングのオペレーションの場として東京の神宮外苑もラゴスの郊外も設計対象としての差異はない。図2にあるように、近接するJR線を無造作に飛び越えた提案に、その態度の一片がよく示されている。

しかし日本人の場合は少し事情が異なる。そこには様々な立場の人々が参加したからである。

このような重要な施設のコンペを遂行する時に、そのプログラムの妥当性を確認するため、建築の専門家に簡単なデザインをってもらう場合が多い。この施設の最大高さが70mとされたのもおそらくこうしたスタディの結果からと推測される。しかし屋内面積28万 m^2 の規模はどのような根拠で決められたのだろうか。先に述べた代々木の国立競技場の8倍、東京国際フォーラムの2倍の床面積を持つこの施設は、おそらく多くの関連部局から提出された、それぞれの最も理想的な機能と規模の積み上げがこの数字になったのだろう。しかしホスピタリティ、店舗、スポーツ関連機能、図書室、博物館等に対して、代々木の総床面積を超える4万8千 m^2 を与えていながら、それ以上の詳細なプログラムはなく、その配分は参加建築家に任せられているようだ。私自身これまで国際コンペに審査員として、また参加者として様々なプログラムに接する機会に接してきたが、これほど主催者の守備範囲の責任を放棄したものを見たことがない。このプログラムを前にし

て、特にコンペ参加者達はどのような気持ちでこれに接したのだろうか。おそらく懐疑、戸惑い、諦めなど、様々あったに違いない。しかしそれらの様相についても今日まで沈黙が支配し、窺い知ることもできない。もしもこれがスイスであれば、プログラムが発表された段階でまずリファレンダムが行われたであろう。プログラムに対してである。市民社会では市民がジャッジである。お上社会ではお上がルールなのだ。今回のお上は更に錦の御旗を掲げたお上であっただけに、いっそう沈黙が支配したのではないかと想像される。そして踊る会議は終了したのだが、会議だけは現在も続けられている。

9月20日以降

2つのシナリオがまず考えられる。ひとつは17日間のスポーツの祭典が東京で行われるというシナリオ。もうひとつは、東京ではないというシナリオ。

第一のシナリオに対してはどうしたらよいだろうか。私はまず新しいプログラム作りを提案したい。そしてその新しいプログラムは次の2つの目的を充足するものでありたい。第一に、50年後の東京のこの地域にふさわしいスケールと内容を持った施設、第二に17日間の祭典を充分満足する機能を持った施設であることが求められる。まず第二の祭典には8万人収容の規模を持つことが最近の一つの標準であるならば、それは満足する必要があるが、同じ規模のものが恒久的にそこに居座る必要はない。むしろこの狭小な敷地と地域の特性を考えた時には、今より大きくない方がよい。そのためには恒久施設は5.5万人を収容し、仮設のスタンドで2.5万人収容すればよいのではないか。当然全天候式ではなくなる。しかし北京の「鳥の巣」も設計の途中でオープンスタンドに変更されている。ロンドンの場合、当初から本設2.5万人、仮設5.5万人のスタンドが提案されていた。したがってこの新しい提案に対するIOCの反対はないであろう。また、使用頻度の低い屋内駐車場は莫大な換気、照明に維持費がかかる。屋内駐車場は最少にとどめ、17日間必要な駐車は周縁の駐車場を貸切にして、そこからホスピタリティサービスを行えばよい。

先に述べたホスピタリティとスポーツ関連施設もその内容に対し、運営主体の見解が未だ曖昧なだけに、これも徹底的に整理し、50年後も都民に愛され、使用され、維持され得るプログラムにしたい。これらの結果を私の知る識者と相談し、ざっとチェックしてもらった結果、新施設のコストはこれだけでも数百億円あるい



図9 フローニンゲンの「浮かぶ劇場」

はそれ以上の削減が見込まれる。工期も短縮される。管理維持費ももちろん縮小されるだろう。

それでは建築家は誰がよいだろうか。新しいプログラムを作成し、それをコンペにする時間的余裕がなければ、一つのオプションは、先のコンペの当選者に敬意を表し、ザハ・ハディドと先に述べたロンドンのメイン・アリーナを担当した当地の競技場専門建築事務所の協同によるロンドン・チームが考えられる。ただし私の希望では基本設計当初から、外苑の歴史、環境、法規を熟知した建築家、耐震構造、日本の施工技術に精しい人々からなる日本チームを参加させることがよりよい結果を生むと思う。“お上がルールだ”と先に述べたが、“私がルールだ”という建築家が昨今増えているからである。

それでは第二のシナリオの場合はどうなのだろうか。その時は第一のシナリオにあった2番目の条件は消えて、1番目の条件だけが残る。そしてそのオプションの幅は現状維持も含めてかなり広いものになるだろう。よい結論に到達するためにはよりオープンな、透明性のあるかたちで様々な意見が交換されていくことが望ましい。

最後に、私は今まで述べたどのシナリオになろうと、少なくとも絵画館前の広場を大正15年に完成した当時のデザインに戻すことを強く提案したい。先に触れた西側の建物を除去し、もしも駐車場が必要とあれば地下駐車場を設ければよい。大正12年(1923年)の関東大震災では7万人余の尊い人命が失われた。その頃造営に着手していたこの絵画館と前庭の計画は、その3年後に完成する。私は冒頭「歴史的遺産として貴重」という言葉を引用したが、更にここの歴史を振り返る時、それは大震災で亡くなった人々に対する鎮魂のみちにも見えてくる。

それが平成の都民が未来の都民に対して、また大正の市民に対するささやかな贈り物なのではないだろうか。

〈追記〉昨年『新建築』^{*2}に掲載された私の「漂うモダニズム」の中で、建築が建築家の手を離れたあとの建築の社会性、社会的価値について述べた。今回のエッセイは新国立競技場案を具体的な例として取り上げ、その社会性のあり方を考察している。

注

*1 アイランズ編『東京の戦前 昔恋しい散歩地図』(2004年、草思社、86頁)

*2 『新建築』2012年9月号

今回榎文彦氏から、新国立競技場案についての文章をご寄稿いただきました。『JIA MAGAZINE』では2011年から2012年にかけて、コンペに関する特集を組みました。会員の皆さんも様々な意見をお持ちだと思います。ぜひその意見を『JIA MAGAZINE』にお寄せ下さい。

(『JIA MAGAZINE』編集長 古市徹雄)

古市 ● 榎先生は、どうしてこのコンペに参加されなかったのでしょうか。

榎 ● このエッセイの冒頭で述べているように、我々は東京体育館を現在の場所につくるのに大変苦労しました。したがってこのコンペでは、あまり敷地も広くないところでその10倍の施設をつくることは完全なミスマッチだと直感的に感じました。それが不参加の第一の理由です。そしてまた、このコンペの規約書を見た時に、これは何だと思ったのです。そこにはいくつかの国際的な建築賞を貰った建築家には一種の特典が与えられています。なぜ著名建築家だけにか。日本発の国際コンペであったので、私のような疑問をもった建築家は世界中に多数いたのではないのでしょうか。国際コンペに参加することは多くの建築家にとって夢であり、ロマンなのです。シドニー・オペラハウスもポンピドゥー・センターも、当時無名に近かった建築家たちがつくった20世紀建築の代表作です。我々はそのロマンの燈火を大事に守っていきたいと思います。

古市 ● このエッセイでの一番大事なメッセージを、もう一度教えていただけますでしょうか。

榎 ● 一貫したメッセージはこうした場所における巨大建築を様々な角度から検証していることです。したがって一番大事なことは、この計画案はまだ計画の初期の段階のもので、しかし時間はありませんから、なるべく早い段階に、そのプログラムを根本的に見直すことだと思います。おそらく関係者の中にもこのプログラムに個人的に疑念を持っている人も少なくないと思いますし、もしかしたら内部で既に見直し作業が始まっているかもしれません。そうであれば、そうした見直しの気運を盛り上げるためにも、また、このエッセイで述べた様々なコスト削減の提案が、少しでもお役に立つことがあれば嬉しく思っています。

古市 ● 現在の日本の建築論壇界について、どう思われますか。

榎 ● 私が米国で生活していた1960年代は「The Culture of Cities」を書いたルイス・マンフォードが建築論壇の中心にいて、その意見の是非は別として、誰もが彼の言うことに耳を傾けていました。それだけのオーソリティが彼の発言にはありました。また当時まだ無名のジャーナリストだったジェイン・ジェイコブズがロバート・モーゼスと彼の率いる巨大な組織に対して徒手空拳で戦い始めた時代です。この二人の巨星を失った米国の建築の論壇界の現在は荒涼たるものです。日本ではもちろん彼等のような巨星はもともといなかったし、昔から「物言えば唇寒し秋の風」のその秋風が今でも吹いているのではないのでしょうか。一老建築家が、このようなエッセイを書かなければならなかったその背後にある我々の建築文化の風土について、少し皆で考えてみることであればいいことだと思っています。